

# 人に寄り添う光の空間

## - 様々な感情が混在する弔う公園 -

正会員 天野乃慧  
日本女子大学院宮研究室

### 1 はじめに

暗いトンネルの先に見える光、夜空の月、星、闇の中に見える光に、私たちは自然と視線が向かい、想いを馳せてしまうことがある。ものが見えるために常に存在している光は日常生活の中で意識することはない。しかし、前述したような陰影によって見出された光には、意識が向いて感情を乗せてしまう。建築の光空間を分析した光の専門家ヘンリーブラマーも Master of light (a+u 2003.11)の中でこう述べている。「光という存在はもはや受動的に捉えられる固定化されたイメージではなく、人間の身体や心の変化を及ぼす流動的なイメージを生み出している。生き、動き、感じる主体の内部に起こるエネルギーの変化の反響である」光が空間に差し込むただの要素ではないということである。光はただ受動的に人に与えるのではなく、光から想像を膨らませ、身体や心に変化を与える。光を空間に取り込むことはそれだけ人に関係しているということだ。光の空間が人とどうあるべきか、良い光の空間とは何か考えていく。人に寄り添い、心に変化を生む、人と光を中心とした提案を目的とする。

### 2-1 日常の光の採集と分析

日常から良いと思う光景を採集し、何故良いと感じるのか客観的に光の特徴をあげ、分析することで採集した中での共通項を見つけ、空間化の参考とする。今回採集した光景の共通項はグラデーション、隙間からの光、光と影の対比があがった。

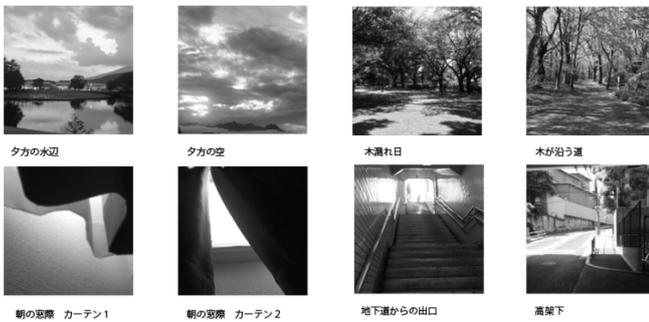


図1 (2-1) によるリサーチの具体例

### 2-2 光のモデル化

日常の光景から得られた共通項からさらに壁で遮るパターンのモデルをつくり考察を図っていく。壁の形状をカーブや直線にすることで、光が空間に均質に広がるか否かに違いが出てくる。また光を壁で遮ることが陰影を出し、光に視線がいくようになる。

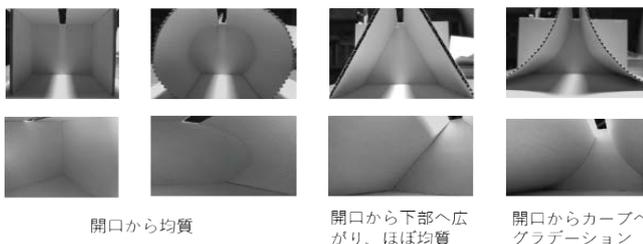


図2 (2-2) によるモデル化の分析

# The space of light that considerate of the other person feels

AMANO Noe  
Japan Women's University Professor Miya's office

### 4 プログラム

人の感情と光を中心とする場、様々な感情の人が共存できる場にするため、誰もが利用できる公園内に葬祭場(火葬場、墓場を含む)を提案する。人を弔う行為は残された人が再び社会に向かうためでもある。下向きの感情が渦巻いていたとしても、感情に寄り添った空間で過ごすことによって徐々に心に変化を与えたい。また公園内に葬祭場を提案することで、園内の光の空間に触れ、思いがけない感情が生まれる変化することでその人の行為までも影響してくる考えた。弔う場を暗い印象だけではなく、親しみ、温かい印象も与える空間にする。

### 5 敷地

敷地は東京都杉並区久我山2丁目に位置する旧富士見ヶ丘運動場、現在高井戸公園に整備中の場所とする。周辺は低層住宅が多く、神田川、玉川上水、二つの川に挟まれた、静かで緑に囲まれ、自然光を取り入れる自由度が高い。またアクセスの良さ、小学校移転からも様々な人が利用することを期待でき、光と人を中心に考えるため場として適しているとし、選定した。

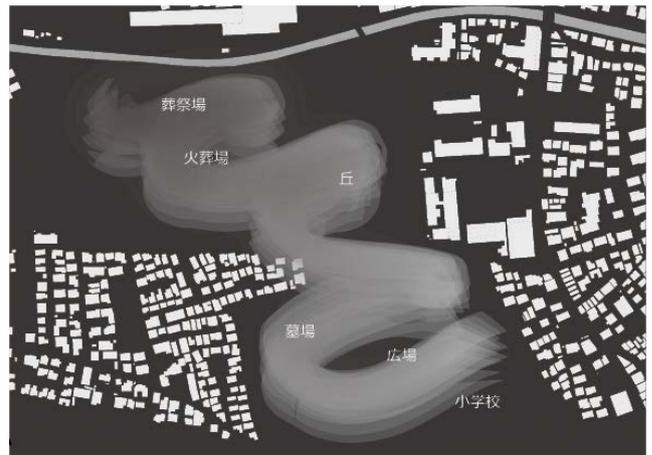
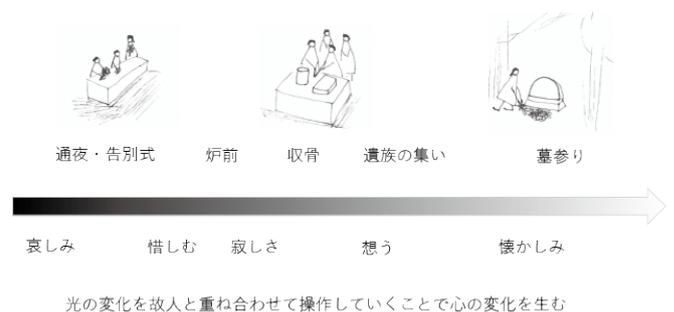


図3 敷地図兼イメージ配置図

### 6 感情の分析

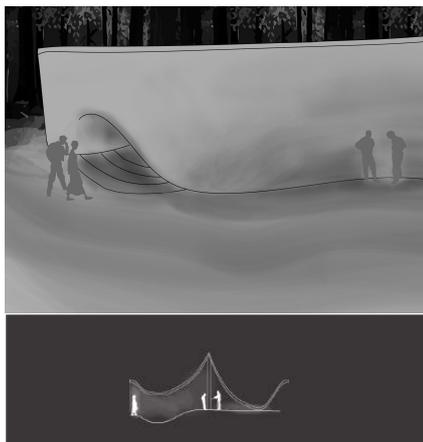
空間ごとの感情を分析し、徐々に哀しみから故人を懐かしむまで遺族が日々に戻ってゆける流れを考察した。光を故人の存在と重ね、この流れに沿わせて光の変化をつける。光が視線を動かし、想像させ、感情を動かすことから、光を感じることで故人を感じる、遺族と故人の感情に寄り添うこととなるとする。



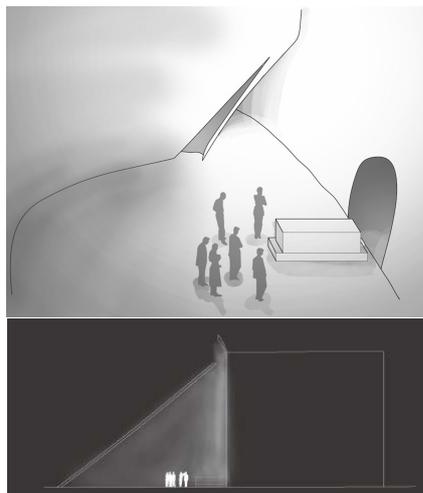
所在地：東京都杉並区久我山2丁目 旧富士見ヶ丘運動場  
 主な用途：葬祭場 公園  
 敷地面積：137000m<sup>2</sup>  
 キーワード：葬祭場 公園 光

Location : 2,kugayama,Suginami-ku,Tokyo  
 Main Use :Funeral field Park  
 Site Area : 137000m<sup>2</sup>  
 Keywords : Funeral field Park light

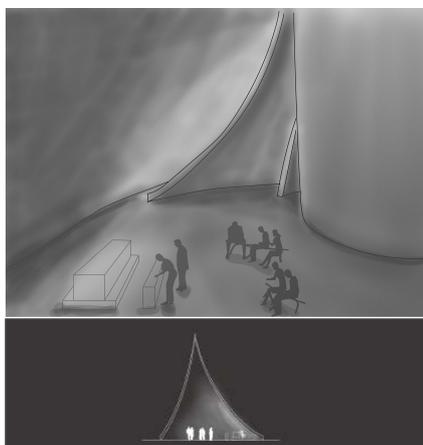
7 提案 各空間パース、光の断面図表現



葬儀場入口  
 葬儀の始まりとして、哀しみの中に入る。



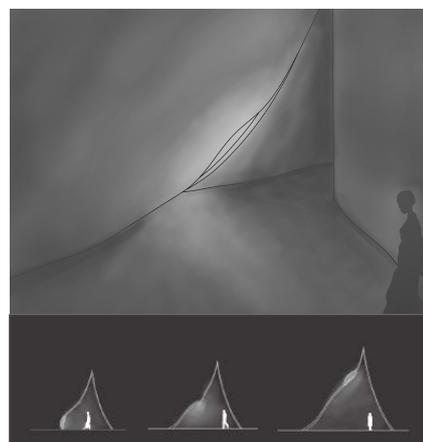
炉前  
 (サヨナラの間)  
 火葬炉の前、遺族が故人を見送る、最期の場となる。切なさや無常のなか、現実に戻ってゆく。



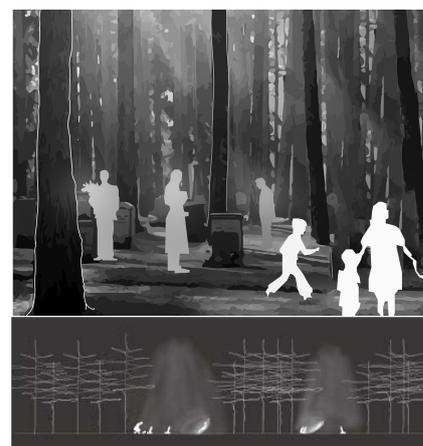
通夜 式場  
 (哀しみの場)  
 最初の故人の死を受け入れる場として哀しみ、切なさを感じる。哀しみの場とする。



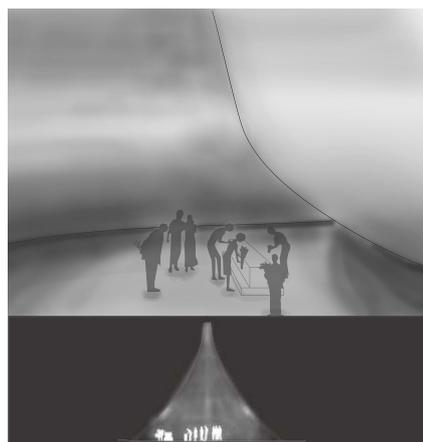
収骨室  
 (想う場)  
 故人への想いを馳せながら、遺骨を収めていく。



通路 (浸る場)  
 死を受け入れるために、故人への哀しみ、切なさ、自分の感情に浸る時間を過ごす場、浸る場とする。



墓場  
 (再会の場)  
 故人との再会の場として、日常に戻っていた遺族が再び故人を思い出す大切な場である。



告別式 式場  
 (お別れの場)  
 火葬炉へ向かう前の最期の別れを告げる場である。死を受け入れ、故人と遺族が別れの想いを告げてゆく。哀しみのなかに故人への想いへ移ってゆく、お別れの場。

葬儀において、開口から光の入り方を操作し、グラデーションをつけることで、光が現れていると感じることが故人の現れを想像させるような空間にしてゆく。遺族と故人がどう死と向き合っていくかということから空間をつくっていく。また北側から分析した壁を使って、連続的につなげていくことで、感情光に途切れることなく、グラデーションをつける。